

GLOBE Voice

The Magazine of Tokyo University of Foreign Studies 2014 Number 9

東京外国語大学



世界70カ国1地域から来た留学生と世界14地域27言語を
学ぶ日本人学生が集う東京外国語大学。
言語、文化、宗教、習慣……が多層的にまざり合う
ここにしかない日常風景を追う。

文・グローブヴォイス編集室 写真・岩崎美里(p3)／竹井俊晴

The world is always right here

世界は
いつも
“ここ”に
ある



2010年春に広報誌を創刊しました。タイトルは「GLOBE Voice」。「地球」と「声(=人)」という2つの言葉を合わせた造語です。東京外国語大学の使命は、「地球をつなぐ声」を発することができる人材を育てること。そのためには、さまざまな国の文化・歴史といった、背景を知ることが欠かせません。9号目となる今号は、日常的に異文化にふれ、多言語が飛び交う東京外大のキャンパスライフを特集しました。

Contents

世界はいつも“ここ”にある —3

学長特別座談会 —8
立石博高学長×JAXA職員

graduated active person
in society —14
NHK 報道局国際部デスク 澤畑剛
水戸芸術館 演劇部門芸術監督 高橋知伽江

person doing research —16
篠田英朗／根岸雅史

コラム「聴」 —20
金指久美子／町田和彦／三宅登之

歴史を刻む在学生 —24
外国語学部ベトナム語専攻4年 叢井綾香

Information —26
新任者、退任者からのメッセージ

News —30



新聞は、英語、日本語、子ども向けの3種類(左)。病院への付き添いで重宝する、各国語に翻訳された医学用語ハンドブック(下)。

CASE. 4

Dormitory Advisor

会館チューター

国際交流会館1号館担当



フリースペースや音楽室、卓球場などに自然と集まる。



Makiko Kobori



日本にしながら、世界の「食」「言語」「文化」を体験できる「外語祭」。

「外語祭」は、毎年11月の5日間、世界の音とリズム、そして味、さらに国旗や民族衣装などの色どりがキャンパスを包む。外国語で上演する語劇、世界の料理が味わえる屋台、さらに、フラメンコ、ベリーダンス、インドネシア舞踊など、世界中の舞踊や音楽を間近で体験できるのだ。「パスポートのいらない世界一周旅行」と外語祭をたどる人も多い。

こうしたキャンパスでの日々の出会いが発展し、いつしか「日本」「外国」「日本人」「留学生」といったカテゴリーがとりはられ、東京外大の学生としてつながっていく。

そんな日も遠くなくさうだ。Ⅴ

「など、さまざまなイベントが頻繁に行われ、日本人学生との交流も盛んだ。教室やサークルの場とは違う、プライベートまで含めた異文化交流の中で、国際性や協調性が養われる。そして、学内行事の中でダントツに国際色が豊かなイベントが外語祭。毎年11月の5日間は、世界の音とリズム、そして味、さらに国旗や民族衣装などの色どりがキャンパスを包む。外国語で上演する語劇、世界の料理が味わえる屋台、さらに、フラメンコ、ベリーダンス、インドネシア舞踊など、世界中の舞踊や音楽を間近で体験できるのだ。「パスポートのいらない世界一周旅行」と外語祭をたどる人も多い。



国際交流会館は、留学生のみが生活する1、2号館と日本人学生と留学生が一緒に生活する3号館からなる。

同じ屋根の下で 国際交流

小堀 慎子さん

大学院総合国際学研究科国際社会専攻
博士後期課程2年

会館チューターは、国際交流会館を住まいとし、居住者である留学生のサポートを行っています。時間は平日夜8時～翌朝8時半(土・日は11時半)、12人のチューターが交代で2人ずつ在館し、留学生からの問い合わせに対応しています。設備に関することや騒音など居住者同士のトラブル相談が主ですが、時々救急・警察対応など突発的なトラブルへの対応もあり、チューターを始めて随分と物おじしくなりました。また、生活環境をより良くするための策を留学生課の方と話し合う中で、広い視点から物事を解決する考え方が身についたように思います。

留学生を見ていて驚くのは、日本語の上達や生活になじんでいくスピード。ほとんど日本語を知らなかった学生が、1カ月もたつと日本語で話しかけてきたり、他の国・地域の学生と親しくなっていたり、会館の生活を楽しんでいます。誰かの役に立ちたいと思い学部時代には個人チューターを、さらにより濃密な交流を求め大学院に進んでからは会館チューターになりました。チューターは有意義な学生生活を送る一つの手段かもしれません。

ここから世界を 感じてほしい！

若浦 仁美さん

言語文化学部(フランス語)2年

私が代表を務める TUFs 多文化交流コミュニティ(通称: たふこみゅ)は、留学生と日本人学生の交流空間です。東京外大はさまざまな国から、さまざまな背景や考え方などを持った人が集まり、世界についてさまざまな視点で学んでいます。この広いようで狭い、また狭いようで広い「世界」を「交流」という形で感じ取ることでできる場を作りたいと思い、「たふこみゅ」に参加しました。

レバノン、中国、アメリカ、モンゴル、インドネシア、ウズベキスタン、ベトナム、フランス、スイス、コロンビア、韓国、グアテマラ、メキシコ……。参加した留学生の出身をみても、本当に多国籍。代表である責任の重さは常に感じていますが、支えてくれるメンバーへの感謝の気持ち、参加者の笑顔を見られた時の達成感など、社会という大きなグループの中で生きていくのに大切なものを、たふこみゅから学んでいます。そして、たふこみゅを始めてから、留学生に気軽に声をかけたり、Facebookなどのメディアでしゃべりしてみたりと、私自身の大学生活がぐんと広がりました。ぜひ「たふこみゅ」であなたの世界を広げてください。



CASE. 3

TUFs Intercultural Community

たふこみゅ

「TUFs多文化交流コミュニティ」代表



毎週金曜日の12:00～12:30、アゴラグローバル1Fで多言語交流「たふこみゅFRIDAY」を開催している。

Hitomi Wakaura

ランチャタイムと一緒に食事を取り、それ以外の時間は、辞書を片手に勉強を教え合う留学生と日本人学生の姿が見られる。

課外活動でも交流が活発だ。留学生の興味はやはり、日本ならではのもの。柔道や空手、剣道、弓道などの武道や、茶道や華道、書道など伝統芸能への関心が高い。日本人学生と同じようにサークル活動に励む留学生も多い。

合気道歴5年のレブロフ・マリヤさん(ロシア出身)もその一人。「稽古で見せていただいた先輩方の動きに魅了され合気道部に入りました。おかげで身体能力が劇的にアップ、心の面では日常の問題に落ち着いて対応できるようになりました」。

キャンパス内の学生寮で生活しながら異文化交流

グローバルなキャンパス環境を「生活」の面から体感している学生もいる。学生寮である国際交流会館の居住者だ。会館内では茶道教室やバザ



留学生は、日本ならではの伝統芸能や武道に関心が高い。

宇宙へ！

学長 立石博高
特別座談会

航空宇宙分野で先端的な研究開発を行うJAXA（宇宙航空研究開発機構）。2010年に小惑星のサンプルを地球へと持ち帰り一躍有名になった「はやぶさ」もJAXAの小惑星探査機だ。理系の職場というイメージが強いJAXAだが、

実は東京外大の卒業生も多く働いている。国際的な連携が求められる研究開発プロジェクトの現場で、卒業生はどのような役割を担い、どのようにキャリアを形成してきたのか。立石学長とJAXAの職員3人が胸襟を開いて語り合った。

飛び立つ？ 文系!?

異文化理解こそが
イノベーションの鍵

社会のさまざまな分野に

有能な人材を送り出す東京外国語大学。

それは、文系の職場だけに限らない。

「理系の職場」という

イメージが強い技術系の世界でも、

東京外大の卒業生は活躍している。

文 吉田耀子 写真 竹井俊晴

Hiroataka Tateishi

Naoko Sugita

Yasuhiko Ozeki

Takayasu Matsuyama

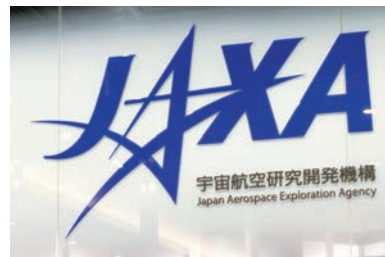


立石博高学長（以下、立石） グローバル人材の育成が叫ばれる中、大学のグローバル化が大きな課題となっています。本学でも2012年に外国語学部を「言語文化学部」と「国際社会学部」に再編。さらに、5年後10年後を見据えた改革案を作っており、今秋には新しい方針を発表する予定です。

現在、私が真剣に取り組む必要があると考えているのが「イノベーション」です。国の予算はもっぱら理工系の分野と人材に集中していますが、イノベーションを実現するために、人文社会科学の分野はどのような役割を果たすべきなのか。過去を反省し、将来を展望するためのヒントを得たいと考えたのが、今回の座談会を企画したきっかけです。

JAXA（宇宙航空研究開発機構）には「理系の職場」というイメージがありますが、東京外大の出身者が10人ほど活躍しておられると伺いました。本学で学んだことが、どのように役立っているのか、お聞かせいただければと思います。まずは最年長の大関さんから。大学時代は何を勉強されたのですか。

小松左京のSF小説でプロジェクトの魅力に開眼



るだけネイティブによる英語の授業を採り入れていきます。「TOEICについては900点以上」という高い目標を掲げて、取り組みを始めたところ。ところで、大関さんは、英語力はご自分で磨いたのですか。

大関 はい。英語力というと恥ずかしいのですが、社内では「東京外大生は英語ができて当然」と思われています。それに、JAXAになってからは、「外国に追いつき追い越せ」の時代ではなく、独自のイノベーションが求められるようになりました。当然、海外のステークホルダーとも連携しながら仕事を進めなければならぬので、英語力は必須ですね。

立石 以前にもまして、外国語や外国との付き合い方を学ぶことが重要になっているという事です。異文化に対するアレルギーがないという点では、本学出身者は有利かもしれません。

大関 私の場合は朝鮮半島が専攻だったので、国家的にも民族的にも対立と交流を繰り返す日本の状況を見ました。その経験から、異文化理解を学ぶことができたような気がします。

立石 大学で学んだ歴史地域研究が役立った、ということですね。

大関 ええ。ただ、社会に出て一番役立ったのは、ゼミで卒業論文を書いたこと

積極的にコミュニケーション能力を鍛えてほしい

1991年外国語学部朝鮮語学科卒業
大関恭彦さん
在学中は端艇部主務を務める。1991年宇宙開発事業団（現JAXA）入社。国内外の各種機関・団体との契約や政府との折衝、社内制度立ち上げなどを担当。2007、09年財団法人リモット・センシング技術センター・出向。10年総務部総務課長。12年より大学研究関連運営計画マネージャを務める。

独立行政法人
宇宙航空研究開発機構
JAXA

2003年大型ロケットや人工衛星、宇宙ステーションなどの開発を中心とする宇宙開発事業団（NASDA）、宇宙や惑星の研究を中心とする宇宙科学研究所（ISAS）、次世代の航空宇宙技術の研究開発を中心とする航空宇宙技術研究所（NAL）の3機関が統合し誕生。宇宙航空分野の基礎研究から開発・利用まで、宇宙航空に関するさまざまな活動を行っている。



異質な文化を肌で理解できるのが、東京外大の強み

1991年外国語学部ドイツ語学科卒業
松山卓靖さん
1991年宇宙開発事業団（現JAXA）入社。契約業務などを経て、96年からフランスに駐在。現在は総務課長として、国会議員など政策決定者に対する理解増進に努める傍ら、健全な組織運営の確保業務改革などを担当。

大関恭彦（以下、大関） 私は朝鮮語学科出身で、佐藤公彦先生の世界史ゼミで地域研究を学びました。卒論のテーマは「1945年以降の韓国の政治と経済」。宇宙開発事業団（現JAXA）に入社して最初の10年間は、外国との接点となる仕事を多く任されました。韓国とはほとんど接点が無かったのですが、専攻語にかかわらず、「東京外大出身人だから、外国との折衝・調整ぐらいできるよね」という感じでした。

立石 世界展開する企業では、外国との契約が付きものですが、宇宙展開するような機構でも、海外との折衝が必要になるわけですね。

大関 そうですね。20世紀最後の10年間は、会社も「キャッチアップの時代」でした。外国といかに肩を並べるか、海外と比べても遜色のない日本独自の航空宇宙技術をいかに保有するかが課題だったわけです。東西冷戦や日米関係を背景に、国際協調が重視され、多国間プロジェクトとして進めることに価値があると考えられていた。このため、外国の機関と折衝する機会も多かったのですが、それができる人材が社内にはあまりいなかった。それで、東京外大出身者が重宝されたのではないかと思います。

立石 宇宙開発事業団に入社した理由を教えてくださいませんか。

大関 小松左京さんのSF小説が好きで、

かもしれません。卒論を書くためには、「何を書くか」を自分で発想し、綿密な調査をして、ロジカルに思考を組み立てなければなりません。自分の考えをまとめて人を説得する必要があるので、プレゼンテーション力も鍛えられました。入社10年目以降はそうした仕事が増えてくるので、大学での学びが生きていると実感しています。

立石 本学も今は卒論が必修となっています。外国語大学で、そこまでやっているところは少ない。そこは本学が誇れる点ですね。

世界のその先

宇宙への

好奇心がきっかけ

立石 次に、松山さんにお伺いします。松山さんは学生時代、多国籍企業をテーマに勉強されたということですね。

松山卓靖（以下、松山） はい。まだ「グローバルゼーション」という言葉もない時代に、ゼミで多国籍企業について調べました。巨大な資金を持つ多国籍企業は、国境を越えて活動する一方で、途上国の環境破壊や労働問題にも加担している。そのポジティブな面とネガティブな面を明らかにしていたわけです。

立石 なぜJAXAに就職しようと思った

『日本沈没』や『さよならジュピター』などを愛読していました。作品を通じてプロジェクトに関心を持ったのですが、たまたま、宇宙開発事業団が事務職を募集していることを知り、OB訪問をしたのがきっかけです。

立石 大きなプロジェクトでは、文系の事務職が必要とされますからね。

大関 そうですね。プロジェクトチームに文系の人間が入ることもありますが、実際にはやはり技術者が中心。むしろ、プロジェクトを展開していく過程で、外国機関との契約や連携を進める時に、文系の仕事が生まれるという感じです。

立石 そこで、英語が必要になるわけですね。本学では、専攻語とともに英語力の強化を目標に掲げ、「世界教養プログラム」を創設しました。その中で、英語による少人数の授業を大幅に増やそうとしています。地域研究の授業でも、でき



たのですか。

松山 学生課でOB名簿を見ていた時に、たまたま、宇宙開発事業団を見つけたのがきっかけです。ロケットを打ち上げたり、宇宙飛行士を宇宙に送ったり、夢があつて面白そうじゃないかと。東京外大に入ったのも、「ゆくゆくは世界に出ていきたい」と考えてのことだったので、もっと先の宇宙まで出かけていく仕事も楽しそうだな、と思ったのです。OB訪問をして入社試験を受け、なんとか滑り込むことができました。

立石 JAXAでは職員の2割が文系だということですが、どういう仕事についていらつしやるのですか。

松山 宇宙開発は巨額の費用がかかり、一国でできるものではないので、国際協力が欠かせません。国レベルでの条約締結や、宇宙機関間の取り決め、海外とのやり取りなども多く、文系の人間が活躍する場面は多いと実感しています。私自身も、科学技術庁（当時）に出向し、国際宇宙ステーション計画にロシアを招聘する業務に携わっていました。その後、フランス駐在になり、技術系の所長とペアを組み、協定交渉や共同シンポジウムの調整などを担当しました。

立石 フランスでは、何語で仕事をして

松山 仕事上のコミュニケーションは基本的に英語です。ただ、街の中に行くと、観光地は別として、フランス語しか話し

てくれないことが多かったですね。でも、そこは覚悟して来ているので、むしろ楽しい経験でした。おかげで、片言のフランス語も話せるようになりました。

立石 異文化と接した時に「楽しい」と感じられるのが、東京外大生の強みだと思います。ところで、JAXAは種子島宇宙センターでロケットを打ち上げていますが、自然環境や漁業への影響もあるかと思います。こうした問題には、どのように対応していますか。

松山 ロケットの打ち上げ期間中は漁ができないので、その間の漁業対策は国が中心となっています。

立石 地元の人に理解を求めるのは、やはり文系の仕事ですか。

松山 種子島宇宙センターの所長も技術系ですし、管理職になれば、技術系も技術のことだけやっているわけではありません。その意味では、文系と技術系が一体となってやっています。

大関 私は入社後3年間、種子島で広報渉外係をしていました。打ち上げがある時は、事前に文科省とJAXAが周辺5県に伺って、「こういう打ち上げをしますので、よろしく願います」と、フェイス・トゥ・フェイスで協力を求めます。また、地元の種子島では、所長と管



ゼロから始められる能力を身につけることが大切

1993年外国語学部英米語学科卒業

杉田尚子さん

卒業後一橋大学大学院法学研究科で国際関係論を専攻。1995年宇宙開発事業団(現JAXA)入社。2000、02年ハルバード大学大学院に留学。科学技術政策専攻。帰国後文部科学省に外向。育休を経て09年復職。10年公共政策分析博士号取得(政策研究大学院大学)。現在は調査国際部調査分析課に所属。



理課長が周辺の集落に行って「ご迷惑をおかけします」と挨拶しています。

立石 巨大プロジェクトも、最後は「人情の世界」ということですね。

留学・子育て・

博士号取得を

フルコースで実現

立石 最後に杉田さんに伺います。杉田さんの資料を拝見して感心したのは、折々に留学や育休を挟みながら、着実にキャリアアップされているという点です。学生時代は英米語を専攻されたそうですね。

杉田尚子 (以下、杉田) 最初の2年間は語学の授業が週6時間あり、それをこなすので精一杯でした。3年生になり、憧れていた志村正雄先生の米文学のゼミと、関心があった小笠原欣幸先生の比較政治



学のゼミに入りました。**立石** 卒業後は社会科学系の分野に進まりましたが、本学で人文学を学んだことは役に立ちましたか。

杉田 それは強く思います。東京外大の出身者は包容力がある方が多くて、困難に直面しても冷静に考え、物事をうまく収められる方が多いような気がします。人文学の分野でヒューマニティを学んだことが、異質なもののへの寛容性につながっているのかもしれない。

立石 グローバル化の中で、個人が主体性やチャレンジ精神を持つことが重要だと言われていますが、組織とは全体で動かすもの。異質なものに對する寛容性や異文化コミュニケーションが求められますし、それが培えることが本学の伝統にもなっています。杉田さんは卒業後、一橋大学の大学院に進学されていますね。

杉田 研究者になりたくて一橋大学の大学院に進学したのですが、行ってみて

「学者になるにはものすごく時間がかかる」と実感しました。大学図書館に誰とも話さず2週間こもっていた時、ふと、「この生活を30歳まで続けるのはキツイなあ」と思い、悩んだ末に就職活動をすることにしたのです。そんな時、就職情報誌で見かけたのがJAXAの紹介記事でした。そこに『国際調整の人材が必要だ』とあるのを見て、ここなら私の関心を生かせるかもしれないと思いました。

立石 入社6年目の時、JAXAの派遣でハルバード大学大学院に留学。科学技術政策を学び、帰国後は文科省に外向されたそうですね。

杉田 02年から、文科省の海洋地球課で、「地球観測データの取得と活用をいかに国際的に盛り上げるか」に取り組みました。このテーマが、小泉首相の提案により03年のG8サミットで取り上げられ、04年春に東京で閣僚級会議「第2回地球観測サミット」が開かれたのです。会議では準備過程にかかり、国際協力を通じた地球観測の推進に貢献することができました。

立石 留学も含めて、いろいろなチャンスを生かしてこられたわけですね。その後、育休を取られ、その間に大学院の博士課程で研究されています。**杉田** 大学院にはそれ以



理系の職場でも、文系が活躍するチャンスは開かれている

立石博高学長

1976年東京外国語大学外国語学部スペイン語学科卒業、78年東京都立大学大学院人文科学研究科史学専攻修士課程修了。同志社大学商学部助教授を経て、92年から東京外国語大学に在籍、2013年4月より学長就任。著書に『スペイン歴史散歩——多文化多言語社会の明日に向けて』(行路社)など。

前から通っていたのですが、出産前にコースワークはほとんど終わっていたので、そのまま博士論文の執筆に取りかかりました。研究テーマは「日本の宇宙政策の進化」です。

立石 今のお仕事を教えてください。

杉田 13年4月に新設されたJAXAの調査国際部で、調査分析を行っています。宇宙分野の国際・技術動向に関してはデータが蓄積されているのですが、より幅広く国内外の政治、経済、産業などを含めた総合的な情報収集、分析が求められています。こうした分野の情報を幅広く収集・分析する仕事に取り組んでいます。**立石** 最後に、東京外大もしくは学生たちにメッセージをいただければと思います。

大関 社会に出ると、いろいろな人と接するスキルが求められます。今はそうしたスキルの習得まで大学教育に求める風潮があるようですが、やはり受身の姿勢ではない。自ら大学の外も含めて、横の広がりや縦のつながりを積極的に求

める姿勢を持つことが大切だと思います。**松山** 異質な文化を体で理解できるのが、東京外大の強み。異文化理解に長けた学生を育てて、他の大学とは一味違う、東京外大ならではの人材を輩出したいと思っています。そして、特定の地域の専門家を育成する研究にも取り組んでほしいですね。企業との共同研究も含めて、シンクタンクの機能を持つことを考えてもいいのではないかと思います。

杉田 見通しが利かない世の中で、ゼロから始められる能力を身につけることが大切だと思います。一つの言語や地域をしつかり学んでおけば、比較によって他を見る視点がでる。ゼロから学べる能力を身につけやすいのが、東京外大の強みだと思います。

立石 本学は2023年に建学150周年を迎えます。ぜひ、今日いただいたご意見に込められるような大学にしていきたいですね。皆さんのますますのご活躍を期待しております。▼



graduated active person in society_02

好きなことをあきらめない 高橋知伽江

水戸芸術館 演劇部門芸術監督

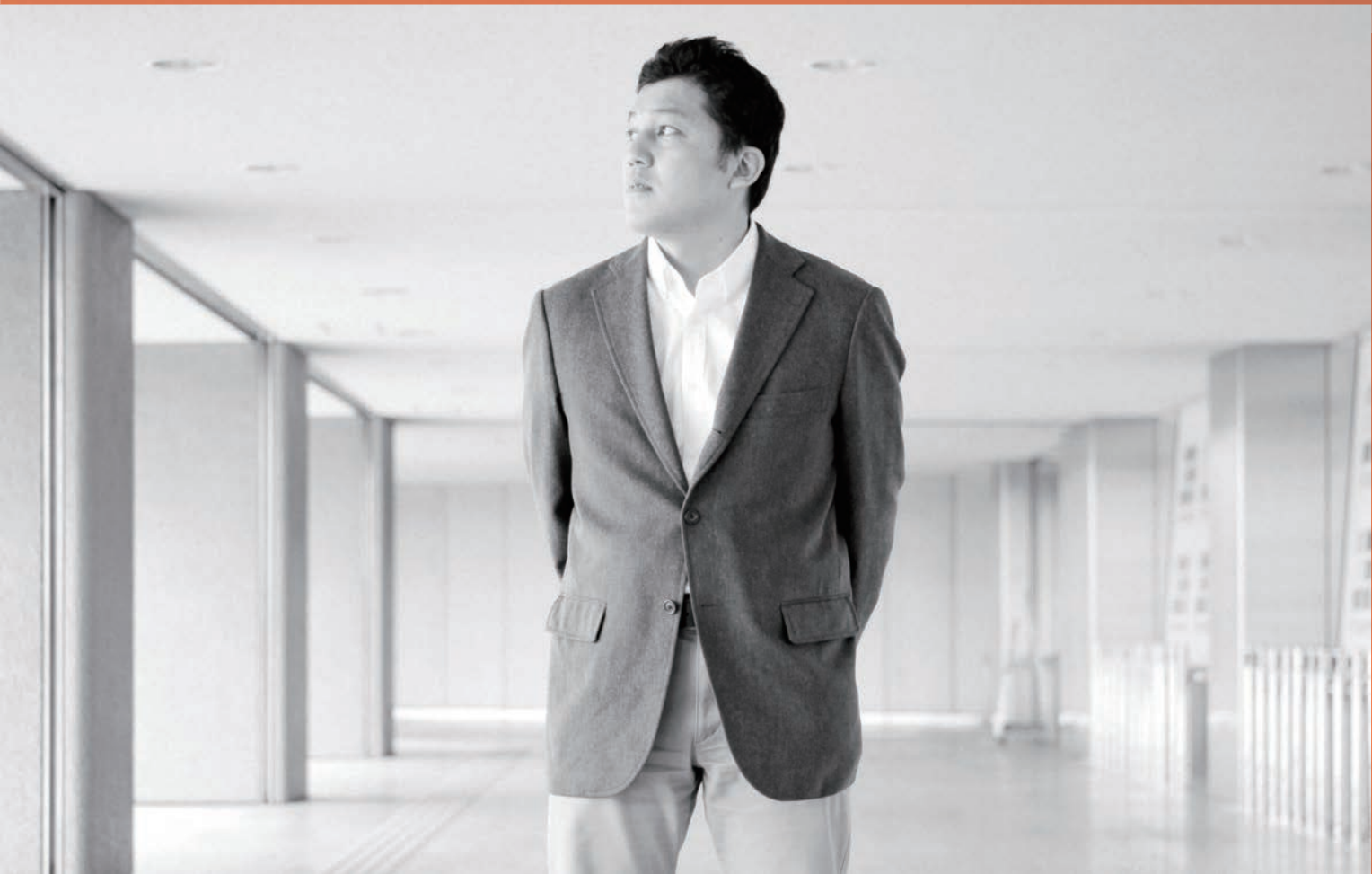


横浜からウラジオストックに向かう船の上。3日かけてレニングラード（現サンクトペテルブルク）まで移動した。

たかはし ちかえ
本名は高橋由美子。1979年東京外国語大学外国語学部ロシア語学科卒業後、劇団四季、新神戸オリエンタル劇場での勤務を経て、15年間フリーランスで演劇台本の執筆・翻訳・訳詞を手掛ける。2013年4月より現職。第4回小田島雄志・翻訳戯曲賞受賞（『出番を待ちながら』『秘密はうたう』）。

ディズニーマのアニメ映画『アナと雪の女王』で歌の訳詞を担当。わかりやすい言葉で観客を魅了し、映画の大ヒットに一役買った。「日本語は英語より多くの音を消費するので、訳詞にはエッセンスを凝縮する作業が必要です」。そう語るの、高橋知伽江さん。水戸芸術館で演劇部門の企画・プロデュースを行う傍ら、演劇の台本執筆や翻訳・訳詞を手掛けている。ロシア語を専攻したのは「チェーホフを原語で読んでみたかったから」。入学後はロシア人教師が主宰する語劇サークルで生きたロシア語を学んだ。3年生の夏にはレニングラードで開催されるロシア語のセミナーに参加。横浜から船で大陸に渡り、シベリア鉄道と飛行機を乗り継ぎ現地入りし、冷戦末期の旧ソ連を体感した。卒業後は野村総研に就職したが、1年半後、「好きなことをやろう」と劇団四季に転職。劇団主宰・浅利慶太の秘書兼助手、広報、国際関係の業務をしながら、台本執筆や英語の翻訳も手掛けるようになった。その後、フリーランスとして

活躍し、ノエル・カワードの日本初演作品『出番を待ちながら』『秘密はうたう』で翻訳戯曲賞を受賞。昨年4月、水戸芸術館の演劇部門芸術監督に就任した。「お客様の反応がダイレクトに返ってくるので、やりがいがありますね。いずれ、水戸ならではの題材で、劇場の財産となる作品を作りたいと思っています」。そう語る高橋さん。だが、ここに至るまでは、けっして順風満帆ではなかったという。「常に自分の才能不足に直面し、やめたいと思うことはしょっちゅうです。それでも好きなのであきらめずに続けていると、助けてくれる人が現れる。そういう日々の積み重ねですね」。訳詞の仕事については、翻訳というより作詞に近い能力が求められるという。「耳で聞いただけで理解してもらう必要があるのです。できるだけわかりやすい言葉を使います。表現の幅を広げるため、日本語の語彙を豊かにすることを心掛けています」。大好きな演劇の世界で今日もまい進する。▼



graduated active person in society_01

東京外大は未来へとつながる場所 澤畑 剛

NHK 報道局国際部デスク



東京外大の卒業生が多数所属する国際部。澤畑さんはデスクとして部員の手帳をチェックする。

東京外大を志望したのは湾岸戦争がきっかけだ。海外のニュースを見て、世界にはさまざまな考えを持つ人がいることを知った。「日本では『アメリカが正しい』という情報があふれる中、悪者とされていたサダム・フセインを支持する人々がいる。そんな宇宙人みたいな人たちと話をしてみたい、と思い、専攻言語をアラビア語に決めたのです」。入学後はフェンシング部に所属。休みのたびにバックパックを背負い、中東諸国やヨーロッパ、アジア、アフリカなどを回った。カイロに語学留学したのは大学3年目の時。世界中から集まっていたムスリム学生との共同生活を通じて、イスラム独特の思考や行動への理解を深めた。「海外では『日本人とは何か』という問いを絶えず突きつけられる。紛争地出身の同世代と交流を重ねる中で『自分ももつと政治や経済、社会について考えなければ』と思うようになりました」。卒業後は中東にかかわる仕事が見たいと考え、98年にNHKに入社。07年カイロ支局に赴任し、9年にドバイ支局を立ち上げた。折しも中東では「アラブの春」と呼ばれる民主化のうねりが拡大していた頃。澤畑さんは紛争の現場からリポートを続けた。「テレビ報道はスピードが勝負。速やかに取材をするためには、限られた時間で、取材相手を見つけて説得し、本音を引き出せるかが鍵となります。そんな時に役立つのが、大学時代に培った語学力でした。通訳を介さずに現地の人と話せることは、非常に大きな強みとなっています」。現在は、東京で中東アフリカ地域のデスク業務にあたる一方で、時折海外に出張し、エネルギー問題の現場を取材している。「海外報道は、異質な文化への適応力が求められる仕事。大学時代にグローバル社会への『免疫』をつけたことが、今の自分のベースになっていると実感します。東京外大は、未来につながるきっかけを与えてくれる場所。この環境を利用して、自分がやりたいことを見つけてほしいですね」▼

さわはた ごう
1998年東京外国語大学外国語学部アラビア語専攻卒業後、NHKに入社。宮崎放送後、報道局国際部を経て、2007年からカイロ支局に赴任し、09年にドバイ支局を立ち上げた。12年4月より現職。

学問と実践の両面から平和構築を探求

Interview with Hideaki Shinoda

冷 戦終結から四半世紀が経過した。しかし、世界各地では今も紛争が絶えず、多くの人々が絶望と苦しみの中にいる。

そんな中、国際関係の歴史や思想を研究しながら、「永続的な平和を作るためには何をすべきか」という普遍的な課題に取り組んでいる研究者がいる。国際政治学者・篠田英朗教授だ。

高校時代はミュージシャンを志し、バンド活動に熱中。

「U2のボノのように、音楽をやりながら、時々は国連事務総長や米大統領に会って偉そうなことを言うのが理想でした」

だが、高校の同期で後の「オザケン」こと小沢健二と出会い、才能の差を痛感。音楽を生業にすることを断念し、早稲田大学政治経済学部に進学した。

研究者を志したのは、3年で政治思想ゼミに入ったのがきっかけだ。ゼミ生や指導教授と議論を戦わせるうち、学問の魅力に開眼。その傍ら、NGOに参加して、ベト

ナム難民に英語を教えるボランティアにも取り組んだ。

クルド人難民から託されたもの

湾岸戦争が勃発したのは、卒業を目前に控えた1991年のことだ。篠田氏はNGOの一員として、イラン北部でクルド難民支援に参



スーダンで行った平和構築についての講演が地元の新聞で報じられた。

加。その後も大学院に通いながら、中東やアフリカ、カンボジアで難民支援に取り組んだ。

クルド人は中東の先住民族で、特定の国家を持たず、各地で迫害されてきた歴史を持つ。88年にはイラク東部のハラブジャで、フセイン政権がクルド系住民を化学兵

器で大量虐殺した。その現場を訪れた時、篠田氏は忘れられない経験をした。

「クルド人から小冊子を渡され、『ハラブジャのことを世界に伝えてほしい』と言われました。その思いを自分なりに引き受けるとすれば、学問はその手段となり得るのではないか、と思いました。彼らが置かれた状況について時間をかけてコミットしていくことに、自分の人生を使いたい、と」

早大大学院の修士課程を経て、ロンドン大学LSE(London School of Economics and Political Science)に留学。立憲国家のルーツともいえる英国で国際関係を学んだ。

「名譽革命を自ら主導し、数百年にわたって維持してきた英国人は、『政治体制とは自分たちの手で作るものだ』と考えています。そこが、占領軍によって戦後の政治体制が作られた日本とは決定的に異なる。それを体感できたことは大きかったですね」

LSEでは国家主権について研

和が脅かされるようなことがあれば、国際社会は主権国家に対して積極的に介入すべきだ、ということになったのです。その背景には、『国家主権とは社会契約によって成り立っており、人権が脅かされれば、主権国家としての妥当性が失われる』という考え方がある。一見きれいごとのようにも見えますが、英米は大真面目です。なぜなら彼らには、その理念に基づいて国家をつくってきた実績があるからです」

不合理で巨大な暴力にいかに対処するか

広島大学平和科学研究センターに職を得て、99年に帰国。被爆者へのインタビューを重ねながら、平和構築の研究を深め、03年には著書『平和構築と法の支配』(創文社)で大佛次郎論壇賞を受賞した。その傍ら、JICAの平和構築研修のリーダーとして、リベリアから来日した行政職員の能力研修を担当。これを機に、篠田氏はシエラレオネやスーダン、スリランカ、アフガニスタンなどの紛争国に赴き、広島における平和構築の事例を紹介していくことになる。

「原爆であれナタであれ、突然降って湧いたような暴力に家族や友人を奪われたという点では、広島の人たちも紛争国の人たちも変わりがない。紛争国の人々が最も関

心を寄せるのは、不合理で巨大な暴力にさらされた時、人はそれをどのように引き受けて生きていくのか、ということです。広島の人たちがあれほどの惨禍に見舞われながらも、なぜそこに留まり、平和な街をつくるために努力することができたのか。その疑問に応えるため、被爆者の方々がどんな思いで戦後を生きてきたのかを、人間のストーリーとして語ることにしたのです」

広島再生の物語は紛争国支援の一つのツールとなり得る、と篠田氏。今後も紛争分析と平和構築の方法について研究を深めながら、NPOによる紛争国の研修支援を続けていきたい、と抱負を語る。

昨年、広島大から東京外大に転任。現在は大学院で平和構築を講じる傍ら、開発援助や人道援助を含む国際協力全般を扱い、後進の育成に励んでいる。

「東京外大は多文化・多言語のリソースがあることが、他の大学にはない利点です。その半面、特定の地域に埋没しがちで、世界全体を相手にして生きるというイメージがつかみにくい。東京外大生だからこそ、世界全体を見る視点を忘れないでほしいと思います」

(注) UNHCR：国連難民高等弁務官事務所



しのだ ひであき
1993年早稲田大学大学院政治学研究科修士課程修了。
93年国連カンボジア暫定統治機構国際投票所責任者。
97年ロンドン大学およびキール大学非常勤講師。
98年ロンドン大学LSEで博士号取得(国際関係学)。
ケンブリッジ大学ローターバクト国際法研究センター、
コンボリア大学人権研究センターの客員研究員を歴任。
2013年4月より現職。

篠田英朗教授

大学院総合国際学研究院 国際社会部門

21世紀を迎えた現在も、世界から紛争がなくなることはない。今日も地球上のどこかで、戦火が燃え広がり、暴力に蹂躪された人々の群れが荒野を埋め尽くす。紛争とはなぜ起こるのか。それを解決するには何が必要なのか。篠田氏は平和構築の方法を模索しながら、今日も終わりのない探求を続けている。

文・吉田耀子 写真・竹井俊晴



クルド人に託された思いを、著書や講演で伝えていく。



〈上〉研究の傍ら平和構築のための人材育成、情報提供、研修などを行うピースビルダーズの理事を務める。

〈下〉紛争国に赴き、広島における平和構築の事例を紹介している。

人とつながる英語教育を求めて

Interview with Masashi Negishi

「英語という教科について、男子は『規則を当てはめて問題を解く』数学のようなイメージを持ち、女子は『内容を味わう（鑑賞する）』国語や音楽のようなイメージを持つ傾向があることがわかっています。いずれにしても、英語を実技系の教科だとは捉えていません。しかし、英語は車の運転のようなもの。文法や単語のことを意識せずに使えるようになるためには、ひたすら実技を重ねることが必要です」

そう語るのは、英語教育学者の根岸雅史氏。英語も自動車教習と同様、技能を磨かなければ、実践の場で使うことはできない。しかし、日本の英語教育ではもっぱら、学科教習が行われ、技能教習はなおざりにされてきた。

「よく『英語を話せるようになったら、外国人と会話します』と言う人がいますが、一度も三振しないでホームランが打てるようになることなどあり得ない。実際に英語を使ってみて、たくさん失敗す

ることが上達の秘訣です。さらに言えば、日本語でも話せないことを英語で話せるはずがない。英語で話すためには、語学の勉強だけでなく、日頃から自分の考えをまとめて、話す訓練をしておく必要があります」

故・若林教授と出会い 英語教育学に開眼

言語学に興味を持ったのは高1の頃。鈴木孝夫の『ことばと文化』（岩波新書）を読み、言葉について考えることのおもしろさを知った。東京外大なら言語学を学べるのではないかと考え、外国語学部英米語学科に進学。生涯の師と仰ぐ故・若林俊輔教授と出会ったのは、入学して3年目のことだった。この時は、言語学そのものをやるのかどうか悩んでいた。

「若林先生の授業はとても過激で、毎回ハラハラしながら聞いていました。『君たちは何も考えずに英語の例文を覚えて込んでいるが、知

らず知らずのうちに特定の価値観を植えつけられている。そういうことに気づかなきゃ』と言いなから、学生の弱点をえぐるような問いを盛んに仕掛けてくる。自分が変な人間になってしまっているのではないかと感じましたね」

学生を挑発して知性に揺さぶりをかける若林マジックに「洗脳され」英語教育のおもしろさに開眼。当時、東京外大には英語教育学の大学院がなかったため、東京学芸大の修士課程に進学し、英語教育学の研究を始めた。

ロータリー財団の奨学金を受け、英国レディング大学に留学したのは84年のことだ。専門研究に特化した日本の大学院と違い、かの地の大学院では、言語学のあらゆる領域を網羅したカリキュラムがぎっしりと組まれている。食事と風呂の時間以外は、まさに勉強漬けの日々を送った。

忙しかったのは勉強だけではなく、ロータリーの奨学生には、社会貢献活動の一環として、地元の

ロータリークラブでスピーチすることが頻々と求められた。

日本のことや、英国に来て気づいたことなどが主な題材だったが、聴衆の質問は、日本の政治や歴史、文化から「水力発電の依存率」にまで及び、返答に窮することもしばしばだった。

「英国では、スピーチにユーモアを仕込まないと納得してもらえない。失敗を重ねるうちに、英国人受けするネタや、披露するタイミングなどのコツがつかめてきました。知らない英国人の集団の前で毎週話をするのは、社会的な面でもよい経験になりましたね」

英語教育の改革に 貢献したい

1985年に帰国し、高校や高専で教鞭をとった後、88年東京外国語大学に任官。テスト論や評価論の研究に取り組み傍ら、検定教科書やNHKリスニング講座などの教材開発を手がけ、英語検定GTEC for STUDENTSの開発も行った。数少ないテストの専門家としての1人として、文科省の政策立案にも参画。その中で、日本の英語教育が抱える問題を痛感させられたという。

「楽天リサーチによれば、日本人の86%が、学校の英語教育に『不満』と答えています。学校

で習った英語は、受験には役立つものの、実際に英語を使う場面ではほとんど役に立っていない。

今の日本の英語教育は、世の中の人が求めていることになっただけで、対応できていないのが実情です」

学習指導要領には「4技能（読む・聞く・書く・話す）の総合的な育成」が謳われているにもかかわらず、大学入試はこれに対応していない。また、指導が変わらないのは、英語教育にかかわる人々が入試の勝ち組であったことと無縁ではない。教師が自分自身の成功モデルに依存しているために、コミュニケーションの要となるリスニングやスピーキングは軽視されがちだった、と根岸氏は指摘する。

「2006年度からセンター試験



ねぎしまさし
1982年東京外国語大学外国語学部英米語学科卒業、
84年東京学芸大学大学院修士課程修了
（教育学研究科英語教育専攻、85年英国レディング大学大学院言語学研究科応用言語学修士課程修了）
88年東京外国語大学外国語学部の助手となり、
2002年から教授。
97年レディング大学で博士号取得（応用言語学）。

根岸雅史 教授

大学院総合国際学研究院 言語文化部門

急速にグローバル化が進む昨今、時代に応じた英語の教育改革は待ったなしの状態だ。

そんな中、教育界もようやく重い腰を上げ、「使える英語」の習得に向けて大きく舵を切った。

今、日本の英語教育はどこへ向かおうとしているのか。

教材・テスト開発や辞書編纂でも多くの実績を持つ根岸氏に、現在の課題と今後の展望を聞いた。

文・吉田耀子 写真・竹井俊晴

科目にリスニングが加わったため、聞くことに対する意識は変わりつつあります。しかし、スピーキングに対する意識は相変わらず低い。

その点が、今の英語教育における大きな課題となっています」

だが、グローバル化社会が到来した今、「使える英語」を習得するための教育改革は、待ったなしの状態だ。では、今後、日本の英語教育はどこに向かうのか。

「今、大学入試の英語試験は4技能型へと大きく舵を切ろうとしています。中でも困難が予想されるのが、スピーキング試験の導入です。しかし、音声認識技術の進歩に伴い、コンピュータによるスピーキング・テストの開発も進みつつあります。これを機に従来のさまざまな問題を解決し、現状を

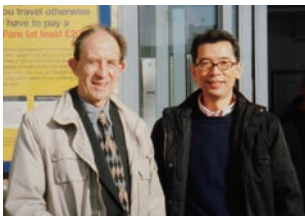
変えるための仕組みづくりに貢献できればと思っています」

単に仕事に役立つだけではない。根岸氏自身も英語を学んだことで、自己表現が豊かになり、人生の可能性も大きく広がったという。ちなみに、根岸氏は若い頃は旅先にもスパイクを持っていくほどの筋金入りの蹴球フリーク。サッカーを題材にしたBBCのDVD英語教材『Goal』の日本版を監修した縁で、サッカー監修担当の岡田武史氏（前日本代表監督）と知り合う幸運にも恵まれた。

2020年の東京五輪開催で、日本中に英語が氾濫する日も近い。人とつながる英語教育の理想形を求めて、根岸氏は今日も模索を続けている。▼



学生時代から定期購読している雑誌。年に数回、海外新刊の紹介などで原稿を寄稿している。



〈上〉レディング大学大学院修士課程の修了式(右から4人目)。
〈下〉ドクター時代にお世話になったドン・ポーター教授。



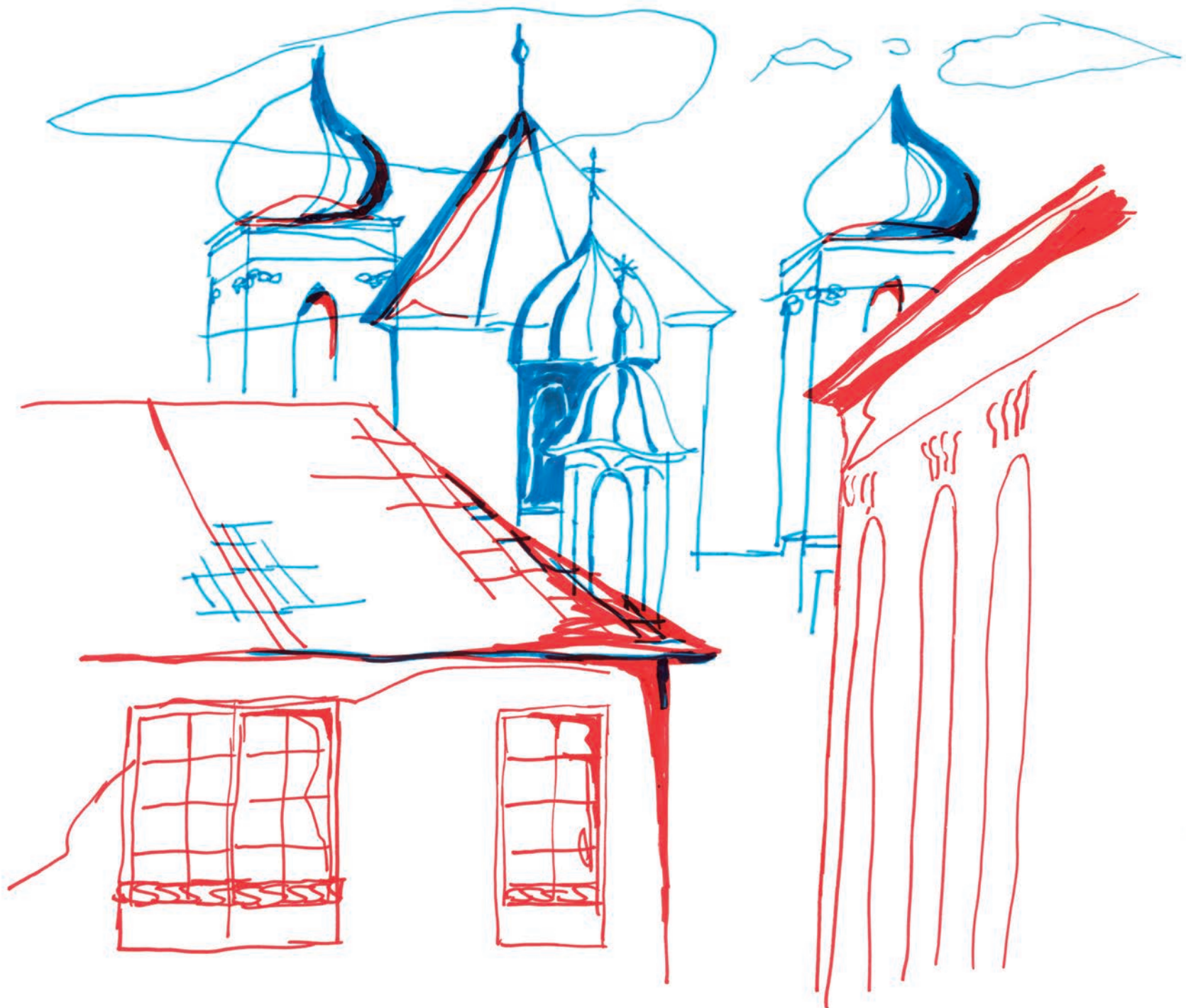
〈上〉若林先生との共著、『無責任なテストが落ちばれを作る』（大修館書店、1993年）。
〈下〉ゼミ合宿で。生涯の師、故・若林俊輔先生（前列右端）との貴重な一枚。



「聴」

kiku

「聴は耳声を待つなり」。江戸時代の儒学者、荻生徂徠の言葉とされる。何気ない日常の中で、偶然あるいは必然に飛び込んでくる音がある。その音は突然で劇的かもしれない。音色に表情があるのなら、人は耳を傾け、そしてその音に隠されている心をつかまえようとするだろう。「聴」。五感で受け止めたその音色は、なぜか時が経っても色褪せることはなく、深く心に刻まれている……。



スラヴ諸語は、ロシア語、チェコ語

スロヴェニア語など、ヨーロッパの中央から東にかけて話されている。同じ先祖から分かれた、10言語以上もある大所帯のグループだ。さすがに親戚どうし、単語や文の作り方には似ているところがたくさんある。

ただ、耳を澄ますと、それぞれの言語から受ける印象はずいぶん違う。ロシア語からは大きなうねりを、スロヴェニア語からは柔らかな弾みを感じる。チェコ語は、タイプライターを調子よく打つときのような短い音の連なりの合間にときおりふわっと伸びた音が入るせいで、せわしくもありながら、同時にのんびりとしている気がする。

正面から向き合い深くつきあった言語は、黙読するとき、先生の声か音声教材の声で、あるいは好きな俳優の声で、頭の中で再生される。つきあいの薄い言語だとこういうことがない。アクセントの位置だとか、イントネーションを学んだところで、むなしく黙り込んでしまふ。

私にとって響く言語は、大学で専攻したロシア語であり、現在教えているチェコ語であり、夏期講習や冬期講習で学んだスロヴェニア語だ。それ以外の言語は沈黙している。間

違っていると分かっているが、響く方の言語の音とリズムとメロディーで再生されてしまうこともある。

身を入れて勉強したつもりなのに、再生できない言語がある。古代スラヴ語だ。「古代」から見当がつくように、この言語を使う人は、今はいない。9世紀半ば、聖書を訳すためにスラヴ世界全体に通用させようと作りだされた文語なので、古代スラヴ語会話なるものこそも存在したことがない。だから、教科書には、音に関する解説はあっても、アクセントやイントネーションについての説明がない。音声教材もない。というわけで、出会って以来しんとしたままだ。

だが、教会に集まってきた民に向かって聖書の一節を読み上げることだって、きつとあったはずだ。そんなとき、どんな風に響いたのだろう。ロシアの教会ではロシア語風にぐわーんとうねり、チェコの教会ではタカタカふわーッだったのかな。スロヴェニアの教会ではポーンと弾んだだろうか。古代スラヴ語の伝統があまり根付かなかったから、スロヴェニア語風はありえないか。いずれにしても、男の人の声なのだろう……。そんなことを想像してみる。すると、ようやく頭の中で古代スラヴ語が勝手に響きます。Ⅳ

1.

イマジネーションに

紡がれる

古の音

大学院総合国際学研究院 言語文化部門 准教授
金指久美子
Text: Kumiko Kanazashi

かなざしくみこ

1991年東京大学大学院
人文科学研究所博士課程退
学。専門はスラヴ語学・ス
ラヴ文献学。著書や編書に
『中級チェコ語文法』(白水社、
2010年)、『チェコ語の基
本』(三修社、2012年)、『
チェコ語のしくみ』(新版)『
(白水社、2014年)、『スロ
ヴェニア語入門』(大学書林、
2001年)、『スロヴェニア
語日本語小辞典』(大学書林、
2009年)などがある。

2. 言葉と声の届く距離

アジア・アフリカ言語文化研究所 教授
町田和彦
Text: Kazuhiko Machida

インドが 多言語・多民族国家
であることはよく知

られている。こういう状況に置かれた為政者が時にヒステリックに全体を一つにまとめようとする行動にでる例は地球上にいくらかもある。異国から来た支配者が君臨することも珍しくないインドの歴史にはこうした発作的な狂気がほとんど見られない。古代から多言語・多民族であったインドは、むしろそれが常態であり普通であると認めた上で今日まできているふしがある。そのインド人が自国の言語の多様性について、やや得意そうにあげるヒンディー語のことわざがある。

「1コースごとに水が変わり、12コースで言葉が変わる」

コースは距離をあらわす単位。辞書では約2マイル(約3・2キロメートル)とある。つまりこのことわざを字義通りにとれば、12コース、おおよそ40キロメートルごとに言葉が変わることになる。ほぼマラソンの距離。東

京の日本橋を起点にすれば八王子まで。江戸時代の参勤交代の1日の移動平均ペース。こう書けばこの距離のイメージが大体わいてくる。

このコースという語は古代インドのサンスクリット語のクローシャが歴史的に変化したものだ。クローシャは「叫ぶ」を意味する語根クルシュと関係していて、「何の遮蔽物もない平地で人の叫び声が届く距離」の意味になった。

つまり、1コースとは物理的な空気の波動である音声を知覚できる最長距離であり、ことわざにあるその12倍の距離はアイデンティティとしての言葉を完全に共有できる最大範囲の距離ということになる。

距離に関するこの一種のトレーサビリティ(一つの基準から順番に測定値を保証すること)はことわざの作者(?)が意図したものであるにしろ、基準単位の根底に人間の音声と言葉が絡み合っていることは確かだ。古代以来、言葉と音声との関係にこだわり続けたインドの言語観が顔をのぞかしているようにおもしろい。

1クローシャの根拠となる古代のトレーサビリティは、一説によれば、8000ハスタに等しいとされる。1ハスタは伸ばした腕の肘から中指の先端までの長さ(約46センチメートル)。お時間のある方は検算をどうぞ。ただしメートル原器のようなものがなかった時代のことをお忘れなく。▼

3.

アクセントが教える自分のルーツ

大学院総合国際学研究院 言語文化部門 教授
三宅登之
Text: Takayuki Miyake

2013 年度前期(4月～9月)に、NHKラジオ「まいにち中国語」の講師を担当した(2014年度後期再放送)。テキスト原稿を執筆しながらの収録で半年間渋谷のNHKに通い、フル回転の日々だった。スタジオでの収録時、実際にはその場にはリスナーはいないわけだが、講座を聴いてくださっているリスナーを常に意識して収録に臨んだ。

中国語は発音が難しい言葉だとよく言われる。特に私が担当したのは初学者向けの、発音の基礎から始める講座である。そこで、中国人ゲストの発音だけでなく、私の解説に出てくる中国語も、初学者が聴いてわかりやすいように、メリハリのきいた大きな声ではっきりと発音することを心がけた。一応中国語で飯を食っている教師でもあるし、ひとまずそれは上手くできたのではないかと思う。

ところが中国語の方ではなく日本語の方で直されることがあるとは、収録を始める前は

思いもしなかった。私は生まれも育ちも広島市、私の母語は日本語といっても広島弁である。生まれて18年間いた広島よりも、東京にいる年数の方が長くなり、普段本人は標準語を話しているつもりである。語彙や言い回しは標準語になっている(はずだ)が、最後まで方言の影響が残るのがアクセントである。NHKは『NHK日本語発音アクセント辞典』があるくらい、アクセントには厳格である。

自分としては標準語で話しているつもりでも、広島弁のアクセントになっていて、録り直しをした語句がいくつかあった。例えば説明の中で「夫妻」という言葉が出てきた時、私が「夫妻(ふ(低)さ(高)い(高)ですわ)」と説明したら、「先生、夫妻(ふ(高)さ(低)い(低))」でお願いします」と、録り直しをさせられた。私にとってはこの単語は「負債」と同じアクセントであるが、標準語ではどうやら違うらしい(「らしい」というのは、未だもって私にはその確信が持てないからである)。このようなことが何度もあった。生放送でなくてよかったと思う。

実は同じく広島弁母語話者である高校時代の同級生たちが何人か私の講座を聴いてくれていて、放送で流れた私の話し方でアクセントが独特な時があり、注意深く聴くと広島人だということがわかったと言っていた。『NHK日本語発音アクセント辞典』のアプリをスマホに入れてトレーニングしなければと思っ

▼

みやけたかゆき

1989年東京外国語大学大学院外国語学研究科修士課程修了。専門は中国語学。著書に『中級中国語 読みとく文法』(白水社、2012年)、『二冊目の中国語』(東洋書店、2007年)、『中国語の基礎 発音と文法』(共著、NHK出版、2013年)、『そのまま使える!中国語会話表現集』(共著、東洋書店、2010年)、監修に『プログレッシブライティング』(中・日英・日中英辞典(小学館、2010年)『ガチャビン&ムックの中国語教室』(小学館、2007年)などがある。



まちだ かずひこ

1980年東京外国語大学大学院外国語学研究科修士課程修了。1998年から現職。専門はヒンディー語、文字情報学。『ニューエクスプレス ヒンディー語』(白水社、2008年)、『図説 世界の文字とことば』(編著、河出書房新社、2009年)、『世界の文字を楽しむ辞典』(編著、大修館書店、2011年)など。

「未知の言語が持つ魔法の力」

讃井綾香

外国語学部 ベトナム語専攻 4年

Influential Face

歴史を刻む 在學生

Text by
Yoko Yoshida
Photo by
Misato Iwasaki



- (1) 外国につながる子どもたちが日本語で作った“自分史”。一緒に考え完成させた。
- (2) ベトナムの伝統楽器「月琴」。名前の由来は胴体が月に似ていることから。弦は二弦のみ。
- (3) 留学中にベトナム南部や中国との国境地帯などを旅した。
- (4) ハノイ大学のお祭りで月琴を演奏。大学、国籍の違うメンバーでバンドを組んだ。



外国語に興味を持ったのは小6の時。イギリスの女優エマ・ワトソン(映画『ハリー・ポッター』シリーズのハーマイオニー役)に英文のファンレターを送り、返事をもらったのがきっかけだった。

「日本語ではない言葉で思いを伝えることができ、相手が喜んでくれている。言葉って魔法みたいだな、と思いました」

未知の言語を学ぼうと、中学から東京外大へ進路を絞り、英語力を高めていった。専攻語は、若くてエネルギッシュなイメージのあるベトナム語を選んだ。

入学後はボランティア活動にも熱中。「府中国際交流サロン」の中にある、東京外大の学生が運営する教室で、外国につながる子どもの学習支援に取り組んでいる。多感な年頃の子どもたちにとって、異文化の中でくらす悩みやストレスは尽きない。

「『変な名前』って言われた」と漏らす子もいれば、「親と母語で話す姿を見られたくない」という子もいる。「あなたはそのままでもいいんだよ」と丸ごと受け止めることで、子どもたちが生き生きとした表情を取り戻すのを目の当たりにした。その経験は、留学先のハノイでも役立った。現地で日本語教師のアルバイトをする中で「ベトナム語を話せる日本人の自分だからこそ、受け止められる思いがある」と実感。

「年齢や国籍、居住地が違って、人と接する時に心掛けていることがあります。それは、『目線を合わせて向き合う』ということ。まずは相手の思いを受け止めた上で、さあ、どうしようと考え。留学やボランティアを通じてそのことの大切さを学びました」

卒業後は、大学院でベトナムの少数民族の言語を研究したいという讃井さん。「どの言葉も、その言葉を通してでしか知ることができない独特の世界観を持っています。そんな言葉の魅力を伝えていきたいですね。東京外大で世界は確実に広がりました。特に、ボランティアで出会った仲間とは一生つきあっていきたいです」。そう言って、顔をほころばせた。▼

Ayaka Sanui

2010年東京外国語大学入学。
3年生の時ベトナムのハノイ人文社会科学大学に1年間留学。児童学習支援などのボランティア活動に取り組む。山梨県出身。



目線を合わせて
人と向き合うことの
大切さを知った

Information

2013年10月、2014年4月に
東京外大のメンバーに
なった方々から
コメントをいただきました

2013年
10月1日より
就任

大学院総合国際学研究院
国際社会部門 教育学社会学 准教授
加藤美帆
KATO Miho



専門は教育社会学ですが他に教職関連の授業も担当しています。東京外大では講義でも積極的に発言をする学生が多いので驚きつつも、学問的な関心をしっかり持っている姿勢に頼もしさを感じています。

教育という領域は身近な問題意識から興味を持つ人が多いのではないのでしょうか。学校や家族など掘り下げていくと、社会構造を読み解く鍵になっています。普段の生活から感じる違和感や疑問から現代の世界を読み解いていくことが教育社会学の魅力なので、そこを皆さんに伝えたいと思っています。

大学院総合国際学研究院
言語文化部門(フランス語学)講師
秋廣尚恵
AKIHRO Hisae

20年前には西ヶ原の旧キャンパスで東京外大の学生としてフランス語を学んでいました。大学も学生も大きく変わ

大学院総合国際学研究院
国際社会部門
(ラテンアメリカ地域研究)准教授
宮地隆廣
MIYACHI Takahiro



2014年4月に着任しました。専門はラテンアメリカを対象とする比較政治学です。ボリビアとエクアドルという南米の2つの国を対象にした、民主体制下における社会運動の分析が主な研究業績ですが、共同研究で開発援助や国民投票に関する調査もしたことがあります。ラテンアメリカは民族問題や政治体制、工業化などさまざまな分野で世界的に興味深い事例を提供してきたことで知られています。ラテンアメリカを通じて、現在の世界を分析し、考える面白さを皆さんに伝えたいと思います。

大学院総合国際学研究院
国際社会部門
(イギリス近代史)講師
伊東剛史
ITO Takashi

2014年4月に着任しました。専門は、イギリス史ですが、具体的には世界で最初

り、2013年10月に赴任して以来、新たな発見の多い毎日です。1999年にフランスに留学し、パリで博士課程を修了したのち、エクス・マルセイユ大学に勤務していました。人生の3分の1を過ごしたフランス、そしてヨーロッパの言語文化は、日本の言語文化とともに、



大学院総合国際学研究院
国際社会部門(ロシア史)講師
巽由樹子
TATSUMI Yukiho

雪、極彩色の聖堂、音楽・バレエ・絵画に史上初の社会主義革命——イメージの鮮烈さに惹かれて近代ロシア史を勉強しはじめました。でも、研究で取り上げられる人々はインテリゲンツィヤや労働者・農民に集中しがち。それを疑問に思った頃、絵入り週刊誌という都会のマス・メデ

の動物園の一つ、ロンドン動物園の歴史を研究しています。動物園を窓口として、当時のイギリス社会のさまざまな側面を覗いてみよう、そうして見えてくるものを総合的に理解しようという研究です。

日本での最初の学会発表は、今から10年前、「未知との遭遇」というタイトルで、ロンドン動物園がキリンを初公開した時に巻き起こったセンセーションについての研究報告でした。あの頃ほど背伸びすることのなくなった今でも、「未知との遭遇」を求めて、日々研鑽を積んでいるつもりです。

大学院総合国際学研究院
国際社会部門
(イタリア近現代史)講師
小田原琳
ODAWARA Rin



人間が過ちを繰り返さないために歴史学はあると言われますが、人類史は悲劇の積み重ね以外のものではないようにさえ見えます。ではなぜ歴史を研究するのか。それはかつて発せられた、かなわなかった希望や耳を傾けられな

イアの存在を知りました。読者は、富裕だけでも「トルストイって誰？」と聞くような、いわば「普通の」人たちです。この顧みられることの少なかった史料からロシア通史の再考に取り組んでいます。歴史を解釈する面白さを皆さんと考えていきたいと思っています。



留学生日本語教育センター
日本語学コース言語学講師
金愛蘭
KIM Eun



学部時代の京都での1年間(日本語日本文化研修生)を通してニホンゴと日本に魅了され、卒業後再度来日し、その魅力を留学生や日本人に伝える仕事をしています。さまざまな言葉や文化について学び、ふれあえる東京外大は、小さな地球のように感じます。すてきな緑に囲まれたキャンパスの中で、いろいろな「地球人」に出会い、いろいろなコトバについて語り合えたらと思います。

った祈りを書き留め、出会うことのなかったそのひとの生を愛おしむためではないでしょうか。

今、届かぬ怒りや悲しみを抱えて生きる私たち自身の生

も、いつか誰かが受けとめてくれると信じられれば、無駄ではない。遠くへ投げ掛けられた呼び声を聴くような、歴史研究でありたいと思っています。



大学院総合国際学研究院
国際社会部門(ポーランド史)講師
福嶋千穂
FUKUSHIMA Chino

近世ポーランド・リトアニア史、特にその東部ルテニア(ルシ)地域の宗派問題を研究しています。近世ルテニアは現在のベラルーシ・ウクライナの前身にあたり、



2014年
4月1日より
就任

大学院総合国際学研究院
言語文化部門
(ラテンアメリカ文学)准教授
久野量一
KUNO Ryochi

ハバナで耳に飛び込んできた「ベン・バラカー」、ブエノスアイレスの「コモ・テ・シャマース」。いろいろな地方のスペイン語が頭のなかでいつも響いています。そもそもは三田で『百年の孤独』と『失われた足跡』と『悲しき熱帯』に魅せられ、メキシコシティで似たような境遇の人たちに出会い、ラテンアメリカ文学を研究したいと思うようになり、まだ西ヶ原にいた時の東京外大の大学院に入りました。大学院の途中から、文字テキストにおさまり切ら



ないものをダイレクトに受け止めたくて、調査と称してラテンアメリカ、カリブ地方に通うように。それで気づいた2014年4月、東京外大に着任というわけです。

昨今のウクライナ問題の萌芽もすでにこの時代に見られました。

学部でロシア語、大学院で西洋史を専攻した私にとってポーランド語の授業を含む本学での教育活動は大きなチャレンジですが、ポーランドの歴史、ひいては国民国家ポーランドに限らず近隣の、所謂「歴史的ポーランド」が包摂した諸地域にも関心を持ってもらえるような授業ができればと思います。

アジア・アフリカ言語文化研究所
言語学・モンゴル諸語 准教授
山越康裕
YAMAKOSHI Yasuhiro



東京外大でモンゴル語を学んだ後、14年ぶりに母校に戻りました。現在は話者が数千人程度の、モンゴル語の近い「親戚」にあたる少数言語を対象に研究しています。

高校生の頃、「他人があまり手を出さないような言語を

2014年3月、
退職された先生たち
からの「手紙」

学びたい」とモンゴル語を学ぶことを決めました。たしかに英語や中国語などから見ればモンゴル語はマイナーな言語ですが、現存する世界の言語のなかではむしろメジャーな言語の一つだということを入学後に知ることとなりました。

英語力の向上が叫ばれる昨今ですが、よりマイナーな言語を研究する面白さにも気づいてもらえたら幸いです。

アジア・アフリカ言語文化研究所
言語学・中国少数民族言語研究助教

児倉徳和
KOGURA Norihazu



2014年4月に着任しました。専門は言語学で、シベ語という中国の少数民族言語をフィールドワークにより研究しています。当初は満洲語という中国の清朝を興した民族の言語が現在ではほぼ失われてしまい、シベ語がその満洲語と近いことに興味を持って研究を始めました。しかし、シベ語もまた話されなくなりつつあることから最近では失われつつある言語

を、現在の技術でどのように記録し、残していくかという問題に取り組むようになりました。この取り組みが、現在起きつつある多様性の消失について考えるきっかけになればと思います。

アジア・アフリカ言語文化研究所
人類学・アフリカ地域研究助教

佐久間 寛
SAKUMA Yutaka

20代はじめ、西アフリカのセネガルに半年滞在しました。省庁で経済学的資料を集めることが目的でしたが、極東アジアの島国とはまるで異なる生活世界に圧倒され、資料収集どころではなくなりました。この世界をとらえるために必要なのは、現地で、現地の言葉で、現地について考えること、つまりフィールドワークだ。そうしたい思いこみから人類学へ転身、西アフリカ・ニジェールでの調査を経て、現在に至ります。



今後は、フィールドのミクロな現実から市場経済というマクロな現象をとらえ返してみたいと考えています。

留学生日本語教育センター
日本語教育学・音声学 講師

石澤 徹
ISHIZAWA Toru

2014年4月に着任しました。出身は奈良県で、小さい頃は古墳のそばでよく遊びました。外国語として日本語を教えることが専門で、「日本語が学習者にどのように聞こえているか」などについて研究しています。専門への興味は、小さい頃から習字を習っていたことや、英語の歌詞を上手に歌うためにはどうすればいいかなど、試行錯誤することが好きだったことが影響したのかもしれません。出会いや経験の積み重ねが、明日や未来の自分につながっていると感じ、これからもチャレンジとご縁を大切にしていきたいと思っています。皆さんも、一期一会を大切にしてくださいね。



留学生日本語教育センター
日本語学・日本語教育学 講師

清水由貴子
SHIMIZU Yukiko



2014年4月に着任しました。現在、留学生日本語教育センターで、学部進学留学生を対象に日本語を教えています。私は、高校2年生の夏休みに英国の大学のサマーコースに参加し、そこで言葉も文化も違うクラスメートたちとドキドキ・ワクワクしながら英語を学び、多くの刺激を受けました。日本にいると「日本と世界は全然違う」と思いがちですが、この経験で「日本と世界見た目は違うが、実はほとんど同じ」と思うようになりました。それでいて、日本語教師をしていると日本と世界の意外な違いに出会うことがよくあります。そんな面白さが、この仕事の魅力の一つだと思います。



留学生日本語教育センター

善如寺 俊幸
ZENNYOJI Toshiyuki

第一次世界大戦が勃発するや掌を返したように沸き上がった反敵国キャンペーンを諷し、ベートーベンの歌詞を借りて新聞に訴えたヘルマン・ヘッセのあまりにも有名な呼び掛けがあります。『O Freunde, nicht diese Töne! (お友よ! そうではなく!-)』

若い時代をベトナム反戦運動の周辺部で過ごしました。のちに日本語教育専門家として派遣されるようになってからは冷戦下の一先ずの平和の有り難さを噛み締めつつも日本の窓口として緊張した日々を送りました。このころ隣国の反日政策に過敏に反応して報復的な嫌感運動で応えようとする風潮もあるようですが、この日本をそうした国にはしないという覚悟に、そうした流れに与せず抗い諫す覚悟にこそ、世界で、あるいはこの東京外大で、さまざまな国々の若者を相手に日本語教育に携わってきた者としての誇りを持ちたいと固く思

があります。『O Freunde, nicht diese Töne! (お友よ! そうではなく!-)』最後に、漢字がすべて黒丸に見えてしまうという留学生や漢字をリストの順番でしか覚えられないという留学生——二十余年前の彼らとのふとした出会いを契機に編み始めた「漢字系統樹」も「漢字イメージトレーニング」も幾度となく迷走と停滞に陥りながら、留学生や仲間の力強い支持や激励によって完成しました。長い間変わることなく背中を押して続けた留学生、いつも温かい声援を送ってくれた国内外の教師仲間の皆さんに心より感謝申し上げます。

《座右の銘》
一向一途一心

《お薦めの1冊》



『漢字百話』中公新書 白川静(著)
一言……「日本語学習あるいは日本語教育の関門でもある漢字の面白さ奥深さを説く白川文字学の入門書です」

《座右の銘》
自分を大切に
生きる

《お薦めの1冊》



『虚空遍歴』新潮文庫 山本周五郎(著)
一言……「たとえ夢はかなわなくとも、その夢を一生追い求める人生だってある……」

利用者が希望すれば複数の支援組織が互いに連携しながら一人の学生の支援にあたるといった体制がとれるようになったのは、ここ数年のことです。この14年間で本学の学生支援は大きく変わりました。着任当時は予想もできなかったことです。こうした環境のもと、微力ではありますが、学生支援に携われたことを光栄に思っています。

最後にありますが、私が本学でカウンセラーとして仕事を続けることができたのは、大学および教職員、学生の皆様のご理解、ご協力があったからこそと思います。心より御礼申し上げます。

03

東京外国語大学出版会刊行の注目の4冊

『画像史料論——世界史の読み方』

歴史を学び、地域を探究するために、私たちは“過去からのメッセージ”とどう向き合えばいいのか——。本書は、古今東西の歴史的な画像を歴史研究・地域研究の史料として扱うための方法と意義を、「画像を読み解く」「画

像を造る／破壊する」「画像が語る」の3部構成のもと、鋭い着眼点と魅力的な発想法によって論じています。豊富な画像史料をカラーで収載し、本学の教員19名が世界と歴史の実相に迫る、画期的な史料論です。



吉田ゆり子、八尾師誠、千葉敏之 編
2014年4月10日発行
A5判／並製／326頁
定価：本体2,800円＋税

『カンポンボーイ』

舞台は1950年代、マレーシア・ペラ州のとあるカンポン(＝村)。高床式の本造家屋に響きわたる歌声、大きなゴム園、自転車での買い出しや、午後5時の郵便列車、コーラン塾、川遊びに魚とり、そして割礼……。当時の村での暮らしぶりや、人々が忘れてしまったかつての風景が、懐かしくも鮮やかに浮かび上がります。

10代前半から漫画家として活動を開始したというラットが、輝ける少年時代を丹念にたどり、ユーモラスにして詩情あふれる筆致で描いた傑作漫画。世界で読み継がれてきたマレーシアの古典的名作を、マレー語からの新訳でお届けします。東京外国語大学出版会とマレーシア翻訳・書籍センターによる共同出版。



ラット 作
左右田直規 監訳 稗田奈津江 訳
2014年6月30日発行
A5判ヨコ／並製／160頁
定価：本体1,800円＋税

『人はみなフィールドワーカーである——人文学のフィールドワークのすすめ』

フィールドワーカーとは、どんな手法で、どのようなフィールドワークを行っているのか——。「フィールドに入る」「フィールドワークを支えるもの」「過去をフィールドワークする」の3部構成で、歴史学・言語学・人類学の研究者17

名が、アジアからアフリカにかけての広範な地域を対象に、フィールドとのかかわりを語ります。日常と、世界と、知を「フィールドワーク」するための入門書。本学アジア・アフリカ言語文化研究所創立50周年記念出版。



西井凉子 編
2014年6月30日発行
A5判／並製／296頁
定価：本体2,300円＋税

『山口昌男 人類学的思考の沃野』(近刊)

2013年3月に逝去された本学名誉教授・山口昌男さんは、文化人類学という学問領域を超えて、戦後日本の思想界、読書界、そして文化・芸術分野において、多彩な足跡を残されました。本書は、昨年6月に本学で開催された追悼シンポジウムの記録をはじめ、故人との親交が深かった方々によるエッセイ、知の探究者とし

ての足跡をたどり、その思考と想像力を豊かに読み解く論考のほか、山口による貴重な重要論文(単行本未収録)、詳細な研究・著作目録と年譜などを収めた追悼論集です。つとに旺盛な知的好奇心と縦横無尽の行動力で知られるこの“知の巨人”の人と思想を通じて、未来の知性と文化への展望を試みる一冊です。



真島一郎、川村伸秀 編
2014年8月下旬発行予定
A5判／並製／456頁
予価：本体3,200円＋税

News

国連アカデミック・インパクトに参加

東京外国語大学は、国連アカデミック・インパクトに参加しました。国連アカデミック・インパクト(UN Academic Impact / UNAI)は、国連広報局(DPI)アウトリーチ部が行っているプログラムです。大学をはじめとする世界の高等教育機関と国連との連携を促し、それにより、世界の高等教育機関が国連の業務・活動へ積極的にかかわることができる仕組みを作ることを目的としています。

国連アカデミック・インパクトに参加している世界の高等教育機関は、次の原則を支持し、その実現に向け、さまざまな活動を積極的に展開していきます。

- 原則1：国連憲章の原則を推進し、実現する
- 原則2：探求、意見、演説の自由を認める
- 原則3：性別、人種、宗教、民族を問わず、全ての人に教育の機会を提供する
- 原則4：高等教育に必要とされるスキル、知識を習得する機会を全ての人に提供する
- 原則5：世界各国の高等教育制度において、能力を育成する
- 原則6：人々の国際市民としての意識を高める
- 原則7：平和、紛争解決を促す
- 原則8：貧困問題に取り組む
- 原則9：持続可能性を推進する
- 原則10：異文化間の対話や相互理解を促進し、不寛容を取り除く



世界人権宣言 第1条 27言語訳

全国外大連合憲章調印式

東京外国語大学は、全国の6つの外国語大学(関西外国語大学／神戸外語大学／京都外国語大学／神戸市外国語大学／長崎外国語大学／名古屋外国語大学)と外

大連合憲章を締結し、2014年6月26日に全国外大連合憲章調印式を行いました。今後、憲章に基づき各大学間の連携を深めていくことになります。



協定書を持つ各大学長と協定書

02



東京外国語大学
Tokyo University of Foreign Studies

〈編集後記〉天に届く塔を建てよう——。人類の傲りに神が下した罰は、言語の混乱（バベル）、つまり多言語化であった。言葉の壁は以来、人類の不対立の根本要因でありつづけている。世界の諸言語を学ぶ日本人学生と、日本語を学ぶ世界各地の留学生が集う東京外大は、新しきバベルでありたい。言葉の壁を乗り越え、力を合わせて美しい塔を建てることのできるアダムとイヴの園としての。

（編集子）

GLOBE Voice

グローバルタイムス

2014 Number 9

The Magazine of Tokyo University of Foreign Studies

2014年7月発行

発行 東京外国語大学

〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1

総務企画課広報係

編集 広報マネジメント室

編集協力 日経BPコンサルティング

印刷 大丸グラフィックス

アートディレクション 犬飼健二

表紙撮影 市橋織江

デザイン 糸川あゆみ（犬飼デザインサイト）

©東京外国語大学2014
本誌記事・写真・イラストなどの無断転載を禁じます。